



Title	コメント
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 30-33
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/72183">http://hdl.handle.net/2115/72183</a>
Type	bulletin (other)
File Information	comment.pdf



[Instructions for use](#)

## 《コメント》

水溜真由美

(北海道大学大学院 文学研究科 准教授)

今日のシンポジウム全体のテーマと、3人の先生方のご報告についてコメントさせていただきます。

まず、今日のシンポジウムのタイトルは「教養とジェンダー」ですが、近代日本における教養の意味を考える場合には、「教養主義」を避けて通ることはできません。冒頭の蔵田先生による趣旨説明にもありましたが、今回のシンポジウムの目的の1つは、教養主義をジェンダーの視点から捉え直すことにあるように思います。

そもそも「教養主義」とは何かといいますと、一般には、「旧制高校を主な舞台として、出版文化の発展に伴って成立したエリートたちの学生文化」といった意味で理解されていると思います。時期的には、明治末期から大正初期にかけて成立し、戦後の大衆社会の到来と共に崩壊したとされます。教養主義についてはさまざまな議論や研究がありますが、よく参照される文献として、竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』（中央公論社、2003年）、筒井清忠『日本型「教養の運命」——歴史社会学的考察』（岩波書店、1995年）などを挙げるができます。

それでは、かつてのエリート学生たちは、何のために読書に勤しみ教養を身につけようとしたのでしょうか。その理由は、表向きは、人格を高めるためだったということになっています。ですが、先ほどご紹介した竹内洋『教養主義の没落』などでは、教養がそうした表向きの意味とは別に、文化資本としての意味を持っていたことが強調されています。つまり、エリートの男子学生にとって、教養は、ピアグループの中で人間関係を築いていくための重要な手段でした。その際、どれだけ多くの本を読んでいるか、どれだけ豊かな教養を蓄えているかということによって、仲間同士の間に一種のヘゲモニー争いが生じていました。

さて、以上のような性格を持っていた教養主義がはらんでいた大きな問題として、ジェンダーの偏りがあります。そもそも、旧制高校を主な舞台としていたという点からして、教養主義が女性を排除、あるいは周縁化する形で成立していたことは明らかです。教養や教養主義の問題を考えていく場合に、このことはとても重要なポイントだと思います。しかしながら、従来の教養主義に関する研究は、必ずしもジェンダーの問題に自覚的でなかったように思います。他方で、今日ご報告くださった3人の先生方は、それぞれのご著作の中で、近代日本における教養のあり方や教養主義について、ジェンダーの視点をふまえて問い直しをされていらっしゃると思います。以下では、3人の先生方のご研究、そして今日のご発表もふまえて、教養あるいは教養主義とジェンダーの関係について考えてみたいと思います。

まず、「ジェンダーの視点から教養主義を問い直す」とは具体的にはどのようなことを意味するのでしょうか。一つの方向として、教養主義が持っていた男性中心主義、マッチョさを批判して

いくということがあります。女性が教養主義の基盤となったエリート集団から排除されていたこと、そして、教養主義はそうしたホモソーシャルな関係性の中から生まれた文化であることを批判的に問題化していくことは、大変意味のあることだと思います。

ただし、一つ注意しておくべき点があります。たしかに、戦前の女性は、旧制高校や旧帝大などの高等教育機関からはほぼ排除されていましたが、教養にアクセスすることがトータルに否定されていたかといいますと、そうではないということです。つまり、女性も教養にアクセスすることは許されていたものの、男性と同じような仕方で教養にアクセスすることができたわけではない、ということです。たとえば小平先生は、ご著書の『夢みる教養』の中で、教養をめぐる男性と女性の二重基準について詳しく論じられています。戦前の高等女学校と男子の通う中等学校のカリキュラムは大きく異なりましたが、それと同じように、「男性向け」と「女性向け」の教養には区別がありました。また、先ほどの平石先生のご報告の中で、明治時代において外国語を男性が教えて女性が教わるという構図があったというお話がありました。また、小平先生のご報告にありましたように、戦後、大学の文学部には多くの女子学生が入学したにもかかわらず、教員や研究者の多くは男性でした。つまり、教養の教授や伝達をめぐって、男女の間に非対称的な関係が存在したということです。あるいは、平石先生のご研究では、明治時代に、教養ある女性をファム・ファタールのイメージで表象したり、女徳を欠いているとして否定的に表象したりする状況があったことが指摘されています。つまり、女性がどのように教養を受容すべきか、教養とどのような関係を取り結ぶべきかといったことを、社会の中で実質的にヘゲモニーを握る男性が定義する状況が存在しており、その中で男性にとっての教養のあり方と女性にとっての教養のあり方が大きく差別化されてきたということです。

ただ、もう一つ見落としてはならない点があります。男性が、女性と教養の関係を男性に都合の良い仕方で定義しようとしてきたとして、果たして女性は、男性の定義通りに、教養を受け入れてきたのかということです。近代日本において、女性にとって教養とは何であったのかを、社会や男性の視点のみでなく、女性自身の視点からも考えていく必要があると思うのです。実際、3人の先生方のご著書の中でも、男性の思惑に還元されない女性にとっての教養の意味が、さまざまな形で論じられています。今日のご報告は、どちらかというところ、社会や男性が女性と教養の関わりをどのように意味づけていたのかという点に力点が置かれていたように思いますが、女性にとっての教養の意味という点について何か補足していただける点があれば、後ほどお願いしたいと思います。

ついでに、この点について、私の考えを少し述べさせていただきます。近代日本において、教養が、誰よりもエリートの男性のものであったということは間違いなことだと思いますが、歴史を振り返ってみますと、教養がエリートの学生の枠を超え、ジェンダーの枠を超え、階層の枠を超えて広がっていったという事実も見逃せないと思います。

一例として、松田解子というプロレタリア作家についてお話ししたいと思います。松田は秋田



水溜真由美さん

県の荒川鉦山という銅山で生まれ育った、貧困層の女性です。高等小学校を卒業した後、非常に努力をして、1年間だけ秋田の女子師範学校で学ぶ機会を得ましたが、家が裕福で当然のように女学校に通うことができたという階層の出身ではありません。ところが、解子の『女人回想』（新日本出版社、2000年）という自伝を読むと、いわゆる教養主義的な作家や作品の名前がいろいろな形で出てきます。いくつかエピソードを紹介したいと思います。

まず、解子が高等小学校に通っていた頃の話です。解子はとても向学心が旺盛でした。そして、たまたま周囲に教育熱心な先生がいて、日曜学校を開いて勉強好きな子供たちに勉強を教えていたのですが、その学校に解子も熱心に通いました。その頃のことで、解子はいつも学校の帰りにフサという友達の家で宿題をしていたのですが、坑外夫だった彼女のお兄さんは、たくさん本を持っていました。解子はその中に、ゾラ、モーパッサン、ゲーテ、トルストイ、ダンテ、フローベール、ゴッティエなど、外国の作家が書いた本がたくさんあるのを知って興奮します。そして、解子は、フサの家からたくさん本を借りて、自分の兄と一緒に熱心に読んだようです。

二つ目ですが、先ほどお話ししたとおり、解子は秋田の女子師範学校に入学しますが、それよりも前に、どうしても自分のいる環境から抜け出たくて、赤十字の看護学校に入ろうとしたことがあります。ところが、試験には合格したものの、鉦山事務所のタイピストにされてしまいます。坑夫の娘としては、これは一種の抜擢だったと思うのですが、とにかく鉦山事務所でタイプを打つ仕事をするようになります。その時、同じ事務所で働く主任の男性の本箱にたくさん本が並んでいることに気づきます。解子は、その主任の本を、こっそりと読んでしまうのですが、どのような本かという点、これまたゲーテやハイネといった教養主義の必読書なのです。

もちろん、解子はかなり例外的な女性ではあったと思いますが、当時の下層階級の中にも、知的好奇心が旺盛で外国の文学書を読むような女性が一定程度いたことはたしかだろうと思います。つまり、大正期あたりから、教養は、ジェンダーも階層の枠も超えて、国民的な規模で広がりつつあったということが推測できます。

ところで、敗戦後、文化に飢えた人々が文化に対して強い情熱を向けたということがよく指摘されます。総合雑誌の『世界』は10万部も売れたといいます。その延長線上で、一般の市民が各地でサークルを組織して、様々なジャンルの文化活動を行うようになります。戦後の早い時期になぜこういったことが可能になったかといいますと、戦前に大衆レベルでの教養の蓄積があり、知的関心が広がっていたためだと思います。このような現象を理解するためにも、教養が、エリート学生だけではなく、女性や下層階級にとってどのような意味を持っていたのかという点について考える必要があると思います。

最後に、今日における教養の意味を考えたいと思います。

3人の先生方のお話にありましたように、かつての教養主義は男性中心的で、エリート主義的で、非常にいやらしいものであったわけです。そして、それをそのまま今の時代に復活させるべきかという点、多くの問題があります。しかし、教養や教養主義が全く意味のないものかと言えば、私はそうは思いません。それでは、今日における教養の意味はどのような点にあるのでしょうか。

小平先生は『夢みる教養』の中で、今日教養という言葉の意味は非常に拡散していて、お茶、お花、ワイン、ダンス、カラーコーディネイトなど、様々なものが含まれるようになったと指摘されています。つまり、現在教養の意味を考えようとするれば、教養とは何か、というところから

議論する必要があるということでしょう。けれども、とりあえずここでは、教養を、ほぼ古典的な意味で、読書等を通じて得られる人文・社会系の「幅広い知識」であると捉えておきたいと思います。

先ほどお話ししましたように、従来の教養主義についての研究は、一面において、教養の持っていた裏の意味、たとえば文化資本としての意味に目が向きすぎてしまい、教養が実質的にどのような意味を持っていたかという議論が蔑ろにされる傾向があったように思います。もちろん、だからといって、教養は人格形成に役立つというような古典的な主張に逆戻りしたいわけではありません。

教養の今日的な意味を考える場合に、エドワード・サイードの『知識人とは何か』（大橋洋一訳、平凡社ライブラリー、1998年）が一つの手がかりになるのではないかと思います。この本の中で、サイードは、知識人はアウトサイダーであり、アマチュアでなければいけない、として、知識人が国家や共同体に安住することの問題を指摘しています。サイードは、知識人は周辺の場所にとどまり、専門分野において自明視されている約束事や国家の中で人々が自明だと考えていることを常に批判的に見ていく必要がある、と主張します。もちろん、サイードが念頭においているのは、狭義の知識人ですが、ここで知識人について言われていることは、知識や教養にアクセスする全ての人に当てはまるように思います。つまり、教養を得ること、知識を幅広く学ぶことの根本的な意味とは、共同体や専門分野の中で自明視されている事柄を相対化したり、批判的に見たりすることであるのではないかと思います。

これで私のコメントを終わりにさせていただきます。

蔵田：どうもありがとうございました。

ではここで、休憩を取らせていただきます。皆さんのお手元に質問用紙があると思います。休憩時間にご記入いただき、会場受付もしくは近くのスタッフにお渡してください。後半は、それを基にして、パネルの皆さんと水溜さんを交えてディスカッションを行いたいと思います。